

肝心かなめの 肝臓 のはなし

9

香川大学医学部消化器・神経内科教授

正木 勉

C型肝炎ウイルスとは

～実態不明だったウイルス～

古くから、手術などによる輸血後に肝炎が起ることが知られていました。

B型肝炎ウイルス以外に、肝

障害を引き起こす未知の肝炎ウイルスが存在することは分かっていたのですが、その実態は長らく不明だったのです。

1987年、私が香川医大（現在の香川大学医学部）4年生の時には、臨床講義に「C型肝炎」という授業内容はなく、C型肝炎ウイルスが多く含まれていたであろう「輸血後肝炎」であるとか、それまでに判明していたA型肝炎ウイルス、B型肝炎ウイルスでもないことから、「非A非B肝炎」として臨床講義を受けました。

約30年前に発見 遺伝子型で分類

C型肝炎ウイルスは、アメリカのカイロン社という研究グループが1989年に発見したものです。このウイルスは大変小さく、電子顕微鏡でしか見出すことができません。

現在まで10種類以上の遺伝子

型が発見されており、アメリカでは1a型が、ヨーロッパでは1a型と3a型が、日本では1b型が70%と多く、残り30%が2a型と2b型に分類されます。

遺伝子型によって治療薬も異なるので、これは非常に重要な情報です。遺伝子型は、血液検査によって簡単に調べることができます。

その後1990年には、日本全国の大学で過去に保存・記録された「輸血後肝炎」、「非A非B肝炎」による肝細胞がんのほとんどがC型肝炎ウイルスであると判明しました。

1990年は、私が香川医大を卒業し、研

修医になって1年目。大学の病棟で駆け回っていた頃です。その頃はC型肝炎ウイルスによる肝細胞がんが病棟の半分以上を占めており、そのような理由から、私はその後の医師の専門領域を肝臓疾患に決定付けました。

次回は、C型肝炎ウイルスの感染してからの自然経過についてお話しします。

